小建築論

生活・環境構成論へ

田中喬

小建築論

または生活環境構成論への試み

江苏工业学院图书馆
藏书章

田中喬

著者略歴

田中　喬　たなか　たかし

本籍岡山県。一九三四年　広島県生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。工学博士。京都大学大学院人間・環境学研究科教授、建築家。建築論・建築術、図学専攻。『建築術の実践　京都の場合』（ナカニシヤ出版）『建築家の世界　住居・自然・都市』（同）他。

小建築論

または生活・環境構成論への試み

定　　価　カバーに表示してあります
発 行 日　1997年3月3日　初版第1刷発行
著　　者　田中　喬
発 行 者　中西健夫
発 行 所　㈱ナカニシヤ出版
京都市左京区吉田二本松町2
電話(075)751-1211　郵便番号606
FAX(075)751-2665
Copyright © 1997 by T. Tanaka

印刷・創栄図書印刷／製本・兼文堂
ISBN4-88848-355-8 C3052

小建築論

または 生活・環境構成論 への試み

本文で引用される斎藤茂吉の「歌」は、主に『斎藤茂吉歌集』岩波文庫から選ばれており、若干は『斎藤茂吉選集』歌集、第一～七巻、岩波書店からも引かれている。

（歌にふられたルビは、双方で少しくい違うが、文庫本の方を優先し、文庫本に収録されていないものについてのみ選集に依る。）

同じく「歌論」は、本文中に特記のないかぎり、『斎藤茂吉歌論集』岩波文庫から引かれている。ページ数は同文庫本のそれを示す。

引用される「歌」は、第　～十七歌集からである。

それら「歌集」名と、それぞれの順序を示しておこう。

『赤光』（第一歌集）『あらたま』（二）『つゆじも』（三）

『遠遊』（四）『遍歴』（五）『とも し び』（六）

『たかはら』（七）『連山』（八）『石泉』（九）

『白桃』（十）『暁紅』（十一）『寒雲』（十二）

『のぼり路』（十三）『霜』（十四）

『小園』（十五）『白き山』（十六）『つきかげ』（十七）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに……1
起章……9
一　『小歌論』に倣って　10
二　作歌を重ねて　14
三　「建築論」へ向けての「歌論」の補足　24
四　都市的風景論への方位　39
承章……55
五　画論に「倣う」歌論に「倣って」　56
六　「説かれた」小歌論との対比　63
七　「生のあらはれ」（説）の全体性　69
八　「写生（説）」の全体性（一）　79
九　同　（二）　96
十　道う、詠う、述べる、そして説く　118

中間部……135
十一　標題「小-建築-論」の解題　136
転　章……153
十二　純粋経験の思惟に触れて　154
十三　観ると発語と　164
十四　観入としての純粋経験　172
十五　場所に居て・観て・写す　182
十六　自覚と私と　192
十七　居て・観て・写す場所　199
結　章……215
十八　詠まれ、述べられた「小-建築論」（一）　216
十九　同（二）　234
二十　同（三）　251
二十一　「建築論」から制作・行為へ　276
二十二　人間存在と制作的人間存在との間で　285
おわりに……297

附　章　「生活・環境構成論」へ向けて……303
あとがき……323

（中扉印形　髙木友之助氏所藏）

はじめに

はじめに

本論は、標題に「小建築論」と言われる通りに、「建築論」の「小論」である。その「建築論」は、「建築-論」として、「建築」-論でありつつ、同時に建築-「論」であり、あるいは建築-「論」の論である。

このような「建築論」は、正しくは「建築論へ向けて」である。以下の論考では「歌論」が参考にされるが、参照される「歌論から」出発して建築論へ向けてである。そして別に「風景論から」建築論へでもある。本論で参照される歌論は、主に「自然風景」を叙景した歌に即しての、そうした歌を制作する行為を問題にする歌論であると言われてよいであろう。このような歌論が建築論のために援用されるならば、建築論はそれと同・異する類比（アナロギア）の構造をもつであろう。以下では、異についても触れつつ、表立っては同の面が着目されるであろう。異に比して、同の方が根底的であると予想される。その場合、主に制作論的な建築論が関心されることになろう。異の面についての論考も十分になされて建築論が十全であるとすれば、本論は初歩的な途上の論述にすぎず、その意味で「小-建築論」であるとされなければならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本論の場合、「建築論」が「歌論」「風景論」に引きよせられることにもなろうが、逆に「建築論」がそれらを含むことになるとも思われ、そのあたりに「建築論」が定位することは現代の建築的状況においてかえって有意義であろう。

標題「小建築論」につづけて、副題のごとくに、「または生活・環境構成論への試み」とされている。生活・環境論の、あるいは私たちの関心からみてとりわけ生活・環境構成論の考察は、現今の事態にあって、「試論」としてでも緊急に要請されているであろう。私たちは、建築論の視点から、この大きな要請に応えようと試みる。いわゆる生活・環境は、まさしく自然・人間「共生」のこととして、真摯に探索されなければならず、先ずはそれは「基礎」的な探求でなければならないであろう。生(いのち)ある自然・自己「一元」の事態へ向けての生きた「構成」が、(「学」的探索に先立って基本的な意味で、)直(じき)じきに「論」究されるよう需められているであろう。こうした基底にかえったところでの原論的な論述は、いわゆる生活・環境の構成という言い方でなされるよりも、自覚的人間存在の「人生・世界」の構成にかかわると、直ちに用語をおき換える用意をしておいた方がよいであろう。

こうしたおき換えによって、いわゆる日常的な生活・環境にかかわる論考がかえって稀薄になるであろうか、そうであるとすればこの副題もまた「小-生活・環境論」である。

通常の建築論にあっての「構成」は、いわゆる物に即しての、「建築物」にかかわっての構成であると言いえようが、仮にもこうした通念を一先ず括弧に入れてみれば、そこでは直ちに、端的に言葉でもって、とりわけ詩歌のそれでもってして構成することこそ、自覚的自己が世界にかかわる制作的構成行為の根本義であろうことを知ることが出来るであろう。――＊私たちは物的構成、物的制作について云々するに先立って、この根本の事態に目を注がなければならない。人生・世界なるいい方に注目したように、私たちは先ずもって人間存在のあり方に定位し、その初発のあり方に定位して「全体的」建築論を問い求めようとしているからである。

このようであるとすれば、先の意味での「小-建築論」は、「小-論」のままで、即ち「歌論」「風景論」に引きよせられたままで、そこから「建築論」へ一歩向かうその途上に於て、一旦は自足してもよいであろう。根本的な層位で、その意義が照射されることになろうからである。

「建築家」は「建築術」を実践する。とともに「建築論」を論考する。ある歌人が作歌し、とともに歌論を論述するのと同じである。私たちはそのような歌人に関心する。（他の一般の歌人は、あるいは実作に専念することもありえようか、しかし建築術の場合はそれだけでは済まない。）かつてヴィトルーヴィウスは、「建築家（アルキテクトゥス）の知識は、……制作と理論から成立つ。……学問をかえり見ないで腕の方に習熟するよう努めた建築家は骨折りのわりには権威を獲得するようになりえなかったし、また理論と学問だけに頼った人たちも本

体でなく幻影を追求していたように思われる。……学問なき才能あるいは才能なき学問は完全な技術人をつくることができないから（『建築書』I、1～3、森田慶一訳）」と書いた。遠く西洋の、とおき時代の建築家のこの自覚が、いま－ここに併して、私たちに共鳴する。風土と歴史の文脈を異にしようとも、建築家にとっての本来のこととして、私たちは、私たち独自のあり方でではあろうが、建築論（建築学ならぬ）の世界に立ち入るよう促される。――本論の末尾近くでみられるように、この小論は、その目的あるいは意義の一として、実践的に建築術に携わる建築家にとっての、建築論の「存在理由」を自覚することに導かれるであろう。本論には、「（小）建築論――その存在理由について」と、別の副題が書き加えられようとそこで言われる所以である。

『建築書』といえば、その中でヴィトルーヴィウスは、建築家に、哲学、幾何学、音楽、天空理論、医術、歴史、法律、文章学、描画を挙げて、それら諸学（術）に通ずるよう要請した。私たちは、建築家として、この要請に従う。ここに挙げられた諸学（術）にそのまま忠実にしたがうことは要らないであろう、多岐に亘る諸学（術）への参照が建築家にとって必須であると言われた、と解してよいであろう。私たちは、すでに触れたように、「小建築論」の依って「倣う」べき材料として、先ずは歌論を参照する。歌論に呼応した短歌も参照する。――他に、若干の哲学的論考に拠って、背面から「支え」られて論述されることになろう。倣われた論考は、支えによって確かめられる。そうした依拠するための論考は、遠い世界からではなく、身近な世界から引かれることになろう。

本論は、起—承—転—結の各章によって構成されている。起—承章と転—結章の間に中間部が置かれている。末尾に「おわりに」が置かれ、附章が附されている。起章では、先ずもって主題モティフを提起する。この提起されたモティフは、この章の内でそれなりに纏まるように述べられる。歌論と歌に依って述べられる。承章では、起章を承けて、そのうちでの要点が立ち入って論じられる。主に歌論が注目される。転章は、起章、承章での主題を一転して別の観点から、ある意味では裏面から支援する。別の哲学的材料に拠って論考される。最後に、結章（の主要部）では、以上の全体を踏まえつつ、とりわけ起章で提起された論点を再確認するよう論述される。（結章では別に、本論全体の基本的な動機としての、あるいは構造としての、人間存在において「よく生きる」ための建築論・建築術のあり方が照明される。）起—結として起章に直に重ねられて、そこでの主題の各契機を厚みあるものとして追体験することが目論まれる。歌の引用が中心になる。その場合、起章（の一部）では、人生に於けるいわゆる「生老病死」のうち、その「生（病）」の局面における歌集、歌論を主に参考にするが、結章（の一部）では、むしろ「老死」の事態に関心し、そうした作歌に照光をあてることになろう。

中間部では、標題「小建築論」が構造的に解題され、本論の骨格が分節して示される。全文の末尾の「おわりに」に於ては、「建築論」として辿って来られた本論の要点が、小文に纏められて述べ（抒べ）られる。

附章では、本論全体が、直面する「問題-解決」の思考法の枠内に位置づけられるべきことが論述される。

＊　早々に論者に聞いておこう。私たちが以下で関心する歌論が言う「作歌」の行為としての「写生」について、それは「世界にたいする人間の能動的働きかけである」と簡明に言われている（中野重治「斎藤茂吉ノート」筑摩叢書21、一三一頁）。前後の文脈から見て、端的にそれは、自然に向けての人間の「構成」的な働きかけの謂である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com